

第5回リンダウ・ノーベル賞受賞者会議(経済学関連分野)

所属機関・部局・職名: 大阪大学・社会経済研究所・特任研究員

氏名: 高尾 築

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。〕

会議全体として、資産価格バブル、金融危機、グローバル化、不平等に関するテーマの講演が多かった。各受賞者は、受賞理由になった専門分野の研究を基軸に、上記の問題について講演を行っていた。全体的な印象として、まずノーベル賞受賞者のプレゼンスキルに感銘を受けた。どの受賞者も、現実データなどの「絵」をたくさん見せながら、「問題は何か」、「何を解決すべきか」を明快に説明していた。

個別具体的な講演の感想として、特にプレスコット教授、ダイヤモンド教授、マイヤーソン教授の講演について述べたいと思う。プレスコット教授は、マクロ経済学の理論モデル(分析ツール)の発展を古典的なモデルから順番にまとめていき、最後に自身が近年書いた論文に基づいた研究を紹介していた。印象的であったのは、マクロ経済理論は今や Hard Science となっていると強調していた点である。そして、国の政策運営が経済のパフォーマンスに最も重要な因子で、どのような政策運営が望ましいかは、まだまだ open question であると述べて締めくくっていたのは、若手研究者に対する激励の気持ちが込められていると感じた。

ダイヤモンド教授は、米国の構造的失業の問題をテーマに講演していた。近年のデータでは、労働市場の欠員率と失業率の関係を示したベバレッジ曲線がシフトしていることが指摘されている。このことは、過去と同水準の欠員率の下でも、失業率が高まることを意味している。これは、労働市場におけるミスマッチの拡大を示唆している。したがって、このような状況下では、直接的にアウトプットを高める財政政策や金融政策の議論よりも、労働市場の構造的な問題に目を向ける必要があると主張していた。印象的だったのは、講演の最後で、政策分析を行うためにどのような理論モデルを用いるべきかを述べていた点である。ルーカスツリーのモデルを例に挙げて、このモデルは資産価格の決定について理論的にエレガントな答えを与えるが、近年の資産取引量の増大に焦点を当てた場合には、有用ではなくなる。特定の分析目的に合った理論モデルを簡潔に構築するのが重要だと若手研究者に説いていた。理論分析を行う時に、このような姿勢が最も重要だと改めて再認識させられた。

マイヤーソン教授は、ゲーム理論の専門家であるが、今回の講演では、自身の直近の研究として、契約理論をマクロの動学理論に導入して、経済変動を説明する理論モデルを説明していた。今回の論文は、前回のリンダウ会議で報告した論文の拡張で、前回の論文はトップジャーナルに掲載され、今回の論文も最近トップジャーナルに掲載されたと話していた。他のノーベル賞受賞者に比べると比較的若いとはいえ、ノーベル賞を受賞した後も、研究の最前線で活躍され、自身の専門分野を他分野の研究に発展させている姿に感銘を受けた。

ノーベル賞受賞者の方々は、現実の経済の問題にとことん向き合っていた。そして、今日の研究が明日の研究に繋がるという情熱をもって研究しているのが感じられた。このような姿を見聞きできた経験を、少しでも私の今後の研究活動に生かしていきたいと思う。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やボート・トリップ等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

リンダウ会議は5日間あり、初日は参加受付とレセプションが行われた。2日目から4日目は、午前にはノーベル賞受賞者の講演、午後はパネル討論会と午前には講演を行ったノーベル賞受賞者との個別ディスカッションが行われた。夜は、公式イベントとして参加者が一同に集まる夕食会があった。最終日は、ノーベル賞受賞者と若手研究者と一緒にボートに乗って、マイナウ島に観光するものだった。

私は、シムズ教授とスティグリッツ教授とのディスカッションに参加した。シムズ教授とのディスカッションで印象的だったのは、これからマクロ経済学が解決すべき問題と、(参加者が論文を読むべき)有望な若手マクロ経済学者の4人を紹介していた点である。シムズ教授は、現在も研究の最前線で活躍されている研究者であるが、真摯にマクロ経済学の発展を願っている姿に感銘を受けた。また、質問している若手研究者に、ラテンアメリカ諸国の人たちが非常に多かった。おそらく、ラテンアメリカ諸国の人達は、リーマンショック以前にも自国で金融危機を実体験しているために、問題意識が強いのだと思う。彼らの自国の経済を何とかしたいという意識が強く感じられて、大変刺激になった。彼らを見習って、自分も、現実の経済問題への関心をもっと高めていきたいと思った。

スティグリッツ教授とのディスカッションで印象的だったのは、とにかく近年の不平等の問題を何とかしないといけないという、確固たる信念が感じられたことであった。夜のディナータイムでは、ダイヤモンド教授の隣に座る機会が得られ、激励を受けた。また写真も一緒に撮って頂けるなどしていただいて、大変いい思い出になった。

全体的に印象に残ったのは、どのノーベル賞受賞者も大変気さくな方々ばかりであるということだ。また、会議自体がノーベル賞受賞者との交流を主目的にしていて、話しかけやすい雰囲気があると感じた。大きな国際学会の基調講演などで、ノーベル賞受賞者(リンダウ会議に参加する前に私が参加した、国際会議ではシムズ教授とスティグリッツ教授が講演されていた)が基調講演を行う時があるが、リンダウ会議のような、話しかけやすい雰囲気はないと思う。ノーベル賞受賞者と直接交流を持てるのは、この会議ならではの醍醐味だと思う。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

休憩時間やランチ、ディナーの時間など、参加者同士の交流する時間が多く設けられていたので、普通の国際学会と比較して、より参加者同士が交流しやすい雰囲気があったと思う。また、欧米の大学院で博士号を取得した後、各国の中央銀行やIMF、World Bank等の実務の現場で働いている参加者も多かった。例えば、インドネシアの人たちは、同じくらいの世代でありながら、自国の政府高官の人達とも仕事でよく面会するらしく、その仕事ぶりを聞いて大変刺激になった。通常の国際学会では、このような交流は得られないため、これもリンダウ会議ならではの醍醐味だと思う。

また、諸外国の参加者、特に欧米からの参加者はお祭り好きで、私自身も公式イベントのディナーの後に、彼らと深夜までバーと一緒に飲みに行ったりした。そこでの会話は、皆ノンテニユアの若手研究者とい

うことで、話題は就職活動や、現在のポジションの研究環境、授業負担、論文の査読プロセスの進み具合などの内容だった。世界中で皆、厳しい競争環境に置かれていることを知って、大変励みになった。

また、休憩時間に日本人参加者と日本語で話をしていたら、前の席のバングラデシュから来た参加者が我々に日本語で話かけてきた。話をしていくうちに、私と同じ大学の隣の研究科に留学していて、私の同期の学生と論文を共著していることがわかり、改めて世界は狭いなという印象を受けた。

全体的に、諸外国の学生は母国語が非英語圏であっても、非常に英語スキルが高かった。私も努力して、英語運用能力を高めていきたいと改めて痛感した。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

JSPS からの支援を受けて参加した日本人は5人だった。他に、ドイツに研究滞在している方が1名、日本銀行からの支援で参加している方が1名いた様であった。このうち、ドイツからの参加者は、私と同じ研究室出身の方で、以前にも何度か学会等でお会いしたことがあったので、改めて世界の狭さを感じた。JSPS からの参加者は皆同世代であったが、ほとんどの方とは初対面であった。経済系だけでなく、経営系の方たちもいたので、異なる業界の話が聞けて、いい機会になったと思う。また、交流が深まるにつれて、就職など将来の事とかを互いに相談し合えて、大変励みになった。また、同世代の方たちは、既に数多くの研究業績を持っていたり、教員になっていたり、優秀な方ばかりであった。私も、もっと日々努力していきたいと思った。

5. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット、具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載すること。

各国の参加者と交流が出来て顔見知りになれたことは、今後、国際学会等で彼らを起点として国際的なネットワークが広がるといったメリットがあると思う。そして、ノーベル賞受賞者だけでなく、同世代の若手研究者からの刺激を受けて、研究に取り組む意欲がより強くなったのが何より大きなメリットだと思う。

6. リンダウ会議への参加を通して得られた以上の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

もし教員という立場になった時には、今回のリンダウ会議の経験を伝えることで、国際化推進の一助になれるようにしたい。

7. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージがあれば記載すること。

ノーベル賞受賞者の講演内容自体は、リンダウ会議のウェブサイトで見ることができる。しかしながら、リンダウに出向くことで、ノーベル賞受賞者の研究に対する熱意などをより肌で感じることができると思う。また、リンダウ会議のオープニングセレモニーでは、前回参加者のインタビューが紹介されていた。そこで、リンダウ会議の何がよいのかという質問で、皆が`communication`と言っていた。私もその通りだと思う。年齢が若いうちにしか行くチャンスがないので、参加資格のある人は、まずは応募してみるべきだと思う。

ちなみに、そのインタビューの他のアドバイスで、誰かが会議中は`Don't sleep.`といていた。それもその通りかもしれない。実際、リンダウ会議は、朝早くから講演が始まり、夜遅くまで夕食会などがある。想定していたよりもハードスケジュールだった。公式イベントの後も、参加者同士で飲みに出かけたりすると、寝るのは深夜遅くなる。私もリンダウ会議中は、夜遅くまで出たので3~4時間くらいしか寝る時間がなかった。なので、会議に参加することになったら、たっぷり睡眠をとり、体調を万全にして臨むのがいいと思います。